

て坊を巡りて覓むれども病人無し。怪びて嘿然す。彼の病みて呻ふ音、夜を累ねて息まず。忍ぶること得ずして、起きて窺ひ見れば、呻鍾堂に有り。実に彼の像なりと知る。信行見て一は怪び一は悲ぶ。時に左京元興寺の沙門豊慶、常に其の堂に住む。彼の沙門を驚かし、室の戸を叩きて白さく「咄、大法師、起きて聞くべし」とまうし、具に呻ふ状を述ぶ。茲に豊慶と信行と、大に怪び大に悲び、知識を率引て、捻り造り奉り畢り、会を設けて供養す。今弥氣堂に安置きて、弥勒の脇士に居ける菩薩是れなり左は大妙声菩薩、右は法音輪菩薩なり。誠に知る、願はば得ずといふこと無し、願ひて果さずといふこと無しといふは、其れ斯れを謂ふなり。斯れまた奇しき表の事なり。

法花經を写し奉る經師邪姪の為に現に悲しき死の報を得る縁 第十八

丹治比經師は、河内国丹治比郡の人なり。姓は丹治比なり。故を以て字とす。其の郡の部内に、一の道場有り。号けて野中堂と曰ふ。願を發せる人有り。宝龜二年辛亥の夏六月に、其の經師を請へて、其の堂に法花經を写し

奉る。女衆參り集りて、淨き水を以ちて經の御墨の水に加ふ。時に未申の間に雲段れて雨降る。雨を避けて堂に入る。堂の裏狭少し。故に經師と女衆と同じ處に居る。爰に經師姪、心熾に發り、嬢の背に踞りて裳を挙げて婚ふ。闇の闇に入るに随ひ、手を携へて俱に死ぬ。ただし女口の温を噛み出して死ぬ。漸に知る、護法の刑罰することを。愛欲の火身と心とを焦すといへども、姪心に由りて穢しき行をせざれ。愚人の貪る所は、蛾の火に投ぐが如し。所以に律に云はく「弱なる背のひとは自づから面門に姪く」とのたまふ。また涅槃經に云はく「五欲の法を知らば、歛樂有ること無し。暫停ること得ず。大の枯れたる骨を齧るが如くして飽歎く期無し」とのたまふは、其れ斯れを謂ふなり。

產生みたる肉団女子と作りて善を修ひ人を化ふる縁 第十九

肥後国八代郡豊服郷の人豊服広公の妻懷妊む。宝龜二年辛亥の冬十一月の十五日の寅時に、一の肉団を産生む。其の姿卵の如し。夫妻祥にあ

一未詳。本説話以外に所伝をみない。  
二大法師位は、天平宝字四年(壬子)に制定された四位十三階の僧位の第一位。信行の、豊慶に對する敬意をあらわす表現。

三上卷三十五縁。

四吽迦陀野儀軌中に「又作随心曼荼羅、中央弥勒菩薩、左方法音輪菩薩、右大妙相菩薩、四方四大天王、法華伝記七十七に弥勒菩薩の兜率天内院での説法を述べて、「時有二菩薩、即是侍者、一名法音(苑)とする古写本も存する林、二名大妙相」とみえる。「大妙声」大妙相、「法音輪」法音林、「法苑林」、どの表記が本来のものか不明。本説話に「大妙声」「法音輪」とするのは、本説話が音声にかかわつての説話展開をみせていることに關係する。本書では、声をあげる仏像は弥勒像が多い。中卷二十三縁、二十六縁、下卷二十八縁。

第十八縁 惡業についての現報説話。今昔物語集十四ノ二十六に書承。

五經を写す者。

六未詳。本説話以外に所伝をみない。  
七大阪府松原市、南河内郡美原町、大阪狭山市、大田市東住吉区、平野区、藤井寺市、羽曳野市、八尾市、堺市あたり。  
八野中郷に所在。羽曳野市の野中寺(註)との關係は不明。九七七年。

一〇「未」は午後一時から三時のころ。「申」は午後三時から五時のころ。「未申之間」は午後三時ごろか。二中卷十一縁。

三「中卷四十一縁」。

四「便握陽神之手、遂為夫婦」(書紀・神代上)。「妹が手を取る」は歌垣の歌の慣用語(土橋寛)。上卷二十八縁。

四「中卷三十五縁。五「中卷十三縁」。

六梵網經古迹記・下本(攷証)。  
七梵網經古迹記・下本に律云、弱背自姪二面門(二松浦貞俊)。弱背は、柔軟な背なかの男「面門」は、口。自分の口を用いて自慰する。  
八大般涅槃經・光明遍照高貴德王菩薩品。ただし、「無飽歎期」を欠く(攷証)。

第十九縁 三宝給・法四に引用。三宝給より本朝法華驗記・下・九十八に書承。  
元肉のかたまり。底本訓釈「肉団(シ)、ム良、下音断」。

三熊本県下益城郡松橋町豊福。  
三未詳。本説話以外に所伝をみない。「豊服」は和名抄では豊福と表記されている。いま「福」と「富」とが同意であること(釈名・釈言語「福、富也」)に注意するならば、豊富、豊福、猴聖、というイメージの結びつきは、秀吉の「豊臣氏創始を連想させる。」「とよとみ」は「豊富」という表記をまず連想させるものであろうから。

三七七一年。「寅時」は午前三時から五時のころ。詳細な日時が記述されるのは、この女子の誕生が文書にされ、そこに詳細な日時が記載されていたのであろう。下文の「見聞人、合し国無レ不奇」も文書の流布にかかわる記述であらう。

「原文不レ俄」。八か月という期間を長いと判断しての叙述(徐々に)の意か)なのか、短いと判断しての叙述(短時間を経ず)の意か)なのか、不明。不思議な誕生をしたかぐや姫の成長は三月はかり(竹取物語)、「七日(古今集為家抄)とされる。

二頭部と頸部のあたりに肉が盛りあがっている。

らざるなりと謂ひて、筥に入れて蔵し、山の石の中に置く。七日を逕て往きて見れば、肉団の殻開けて女子を生む。父母取りて更に乳を哺ませて養ふ。見聞く人、国合りて奇びずといふこと無し。八箇月を経て俄ならずして長大。頭と頸と成り合ひ、人に異なりて頤無し。身の長三尺五寸、生れながら知りて口利く、自然づから聡明し。七歳以前に、法華と八十花嚴とを転読み、熟然にして返らず。終に出家せむことを樂ひ、頭髮を剃除り袈裟を着て、善を修ひて人を化ふ。人の信はずといふこと無し。其の音多く出でて、聞く人爲に哀ぶ。其の体人に異なり、閨無く嫁ぐこと無し。ただし尿を出す寶のみに有り。愚なる俗皆りて、号けて猴聖と曰ふ。時に託磨郡の国分寺の僧とまた豊前国宇佐郡の矢羽田の大神寺の僧と二人、彼の尼を嫌みて言はく「汝は是れ外道なり」といひて、嘲し咄りて鬪る。神人空より降り、杵を以ちて僧を棠かむとす。僧恐り叫びて終に死ぬ。大安寺の僧戒明大徳、彼の竺紫國府の大神師に任せられたる時に、宝龜七八箇年の比頃に、肥前国佐賀郡の大領正七位上佐賀君の兄公、安居会を設け、戒明法師を請へ、八十花嚴を講かしめたる時に、彼の尼闕けず衆の中に坐して聴く。講師見て呵嘖みて言はく「何の尼か濫しく交る」といふ。尼答へて言はく「仏は平等の大悲の故に、

一切の衆生の爲に正しき教を流布く。何故ぞ別に我れを制むる」といふ。因りて偈を挙げて問へば、講師偈を通ること得ず。諸の名高き智しき者、怪びて一向に問ひ試れば、尼終に屈かれず。すなはち聖の化なりと知りて、更に名を立て、舍利菩薩と号し、道俗婦り敬ひて化主とす。昔仏世に在りし時に、舎衛城の須達長者の女蘇曼の生める卵十枚、開けて十の男と成り、出家してみな羅漢果を得たり。迦毘羅衛城の長者の妻、懷妊みて一の肉団を生み、七日の頭に到りて、肉団開敷けて、百の童子有り。一時に出家し、百人俱に阿羅漢果を得たり。我が聖朝に弾き庄さるる土に、是の善き類有り。斯れまた奇異しき事なり。

### 法花経を写し奉る女人の過失を誹りて現に口喎斜む

#### 縁 第二十

粟国名方郡埴村に、一の女人在り。忌部首なり字は多夜須子と曰ふ。白壁天皇の代に、是の女法花経を麻殖郡の苑山寺に写し奉る。時に麻殖郡の人忌部連板屋、彼の女人の過失を挙擧して誹謗るが故に、すなはち口喎斜み、面後

「なりあひ」という語を古本説話集・下・五十三は「なりみちにけり」と説明している。  
一上巻四縁。二妙法蓮華経・提婆達多品には八歳の龍女の成仏が説かれている。  
三唐の実叉難陀の訳の大方広仏華嚴經。八十卷。則天武后による序の存在や、法華寺の華嚴会（三寶給・僧十三）など、女にかかわる。  
六上巻十八縁。七明記されてはいないが、自度か。八中巻四十一縁。九外尿道口。  
一女子の容貌を猴に見立てていうか。  
二熊本市出水、神水本町。  
三大分県宇佐市南宇佐。  
四宇佐八幡宮の神宮寺。「矢羽田」は「八幡」。  
五仏教徒以外の者。仏教徒の立場でいう語。罵言。五からかう。  
六讃岐国の人、俗姓は凡直氏、出家して大安寺に住み慶俊を師とする。華嚴経を学び奥旨を究める（日本高僧伝要文抄・二所引延暦僧録）。  
七「日本古代人名辞典」は同一人とするが、唯識論卷二同学鈔・五にみえる「薬師寺戒明和尚」七七九年に渡唐し七八一年に帰国かは別人であろう。  
八一本説話の当時には筑紫国は筑前国と筑後国とに分かれていた。国府は福岡県太宰府市（筑前国）、久留米市合川町（筑後国）に所在。  
九「彼竺紫國府」は何をさすのか不明。大宰府を意味するか。  
一〇「国師」は国分寺の主僧。七〇二年より国ごとに置かれた（統紀）。七七〇年より増員をみたため、七八三年には、大國と上國には、大國師一人、少國師一人を置くようになった（統紀）。本説話のころの「大國師」とくに「一國府の大國師」とは何か、不明である。  
一宝龜七年は七七六年。日本高僧伝要文抄所引延暦僧録によれば、戒明は、七七八年には在

唐、七七九年にはすでに帰国。七七七年に渡唐し七七九年に帰国か。本説話の「宝龜七八箇年比頃」は、上文の「七歳以前」にも合致し、戒明の伝記とも矛盾しない。  
二佐賀県佐賀市、佐賀郡あたり。  
三未詳。本説話以外に所伝をみない。  
四上巻十一縁夏安居。七四九年より七九四年まで毎年、国分寺では大國師と小國師とらよつて安居に妙法蓮華経と金光明経とが講ぜられた（東大寺要録・八所引安居縁起、貞観交替式。華嚴経と安居との関係は不明）。  
五中巻一縁に、「沙弥は「衆僧」に含まれない」と解せられる記述があった。本説話では、女子の容貌や体形に關しての言か、自度であることに關しての言か、不明。  
六一切諸仏、皆悉具三足、平等大悲、恒不捨離、一切衆生（大方廣仏華嚴經・仏不思議法品）。五どのような偈をあげたのか、不明。  
七上文にみえた「猴聖」のサルと、この「舍利菩薩」のシャリとは、音が近い。  
八賢愚經・十三・五十八。六撰集百縁經・七・六十八。九九州をさす。

第二十縁 今昔物語集・十四ノ二十七に書承。法華経は女の救済にかかわる經典とされた。三上巻十九縁。

三徳島県名西郡石井町あたり。「粟国」は阿波国。三未詳。本説話以外に所伝をみない。

三徳島県麻植郡あたり。三未詳。

三未詳。本説話以外に所伝をみない。麻殖郡には忌部郷がある（和名抄）。毛板屋が女のような過失を誹謗したのが叙述されていない。叙述がいささか抽象的である。書写における文字の誤脱を「過失」としたか。